

忘れられた安楽寺の記憶

一橋大学大学院 社会学研究科 特任講師

古畑侑亮

【翻刻】

凡例

- ・〈 〉内は割付書きを示す。
- ・「 」内は補足部分を示す。
- ・旧字体は新字体に改めた。

〔表紙〕

〔印〕「玉川／谷保／本田」

「武州多磨郡谷保村

天神宮本社建立勸進帳〈略縁并序〉

梅香山

安楽寺」

武州多磨郡谷保村天神はかけま

くもかしこき¹神の御跡を置給ふ靈

蹤²なり、其尊影³御長式尺五寸

座像二渡セ給ふ、倩⁴其来由を尋る

仁皇⁵六十代延喜帝の御宇⁶に菅

相公⁷筑紫太宰府江左遷せ給ひ、

四人の公達も国をわかつて各左

遷せられし中ニも第三の御子なる

三位中将菅原道武卿⁸は、武蔵

国谷保村江配流ましましてけり、かくて

菅相公薨御の後、道武父の配所ヲ

慕ひ常ニなげかせ給ふのあまりに

心筑紫の太宰府⁹より此里¹⁰ニ移させ

給ひ、同菅相公の尊容を彫刻し

聖廟を立て鎮座なし誠ニ膝下¹¹

の奉事¹²ニなすらへ¹³、猶朝暮ニ如在¹⁴の

誠志¹⁵を尽されにき、その天神是

なり、又御菩提の為とて傍に

一寺を建立してけり、則今の梅香

山安楽寺是なり。其後人王九十

代後宇多院¹⁶朝建治元年¹⁷の

事かとよ、勅使正三位藤原経朝卿¹⁸に

仰遣て天満宮の勅額¹⁹を賜りけり、

爰二道武卿七代の苗裔に津戸

三郎為守²⁰

へ十八歳始從頼朝公赴石橋山合戦、

是後所々功名不知其数云々 出東鑑²¹へ

功名猶先祖を耀し襲て此地に領主

たり、抑此天満宮ハ既ニ一千余年

の遠つ天神徳猶あらたにして日ニ

新又月々熾^{2,2}也、黎民^{2,3}一度祈をかけま

くものハ忝も奇瑞^{2,4}靈驗^{2,5}を得ずといふ

事なし、然ルに中古^{2,6}修造以来、星霜

降り積り社殿神さひて^{2,7}棟梁破壊ニ

到りぬるに住持某自誌不能故に

是を四方の有徳^{2,8}に募り尤財施^{2,9}の

多少をえらはず勸進して他力の

資助を乞願ふものなり、若にして

寸緡尺布一資半給の助縁^{3,0}をとて

当社の修造を満足しなんかし、

さてハ俗施の檀越^{3,1}ハ此神の守護

またむなしからまじと言

延享四年^{3,2}丁卯夏五月二十五日

天神別当^{3,3}

安楽寺 堅者^{3,4} 慈性^{3,5} 誌

【語句】

※とくに断りのない場合は、『日本国語大辞典』からの引用。適宜ひらがなを漢字

に改めた。検索にはいずれもジャンパナレッジを利用した。

<https://japanknowledge.com/library>

- 1 (懸けまくも畏き) 口に出して言うのも恐れ多い。(『故事俗信ことわざ大辞典』)
- 2 (れいししょう) 神聖な事跡のある場所。神仏に関する古跡。霊跡。霊地。
- 3 他人を敬って、その肖像または写真などを行う語。
- 4 (つらつら) 物事を深く考えるさま。熟考するさま。
- 5 (にんのう) 神代に対して、人代となつてからの天皇。神武天皇以下歴代の天皇をいう。「延喜帝の御宇」醍醐天皇の延喜年間(九〇一―九二二)。
- 7 (かんしょうこう) 菅原是善(八一二―八八〇)。しかし、ここでは息子の菅原道真(八四五―九〇三)を指していると考えられる。菅原道真の第三子とされる。ただし、道武という名の子供は存在しない。実名を秘して道武と称したとも言われる。
- 9 九州地方の称である筑紫と心づくしをかけたカ。
 - * 仮名草子『竹斎』(二六二―二六三)上「誠にや此天神さまは、人の讒言恐しく、心筑紫に流され給ひし時」
 - 10 当時の武蔵国多摩郡谷保村のこと。
 - 11 (一) ひざのした。ひざのそば。ひざもと。
 - * 『菅家文章』(九〇〇頃)二・賀野達「親老在家七十余、每看膝下涙漣如」を踏まえるカ。
 - (二) 父母、または、目上の人の養護のもと。
- 12 仏語。仏菩薩や目上の者などに仕えること。
- 13 準ずる。類する。肩を並べる。なぞらう。
- 14 神・主君などが、眼前にいるかのように、慎みかしこむこと。また、そのような態度で、ことを執りおこなうこと。によさい。
- * 『論語』八の「祭如在、祭神如神在」による語
- 15 まことの心。誠意。まごころ。

1. 第九一代天皇(一二七四―八七在位)。龜山天皇の第二皇子。名は世仁(よひと)。文永十一年(一二七四)即位し、在位一四年で持明院統の伏見天皇に譲位。この後、さらに持明院統の後伏見天皇が即位したのに抗議して両統迭立(てつりつ)を行なわせた。のち院政を行なったが、後醍醐天皇のとき廃して天皇親政とした。出家して法諱(ほうき)を金剛性という。
- 17 後宇多天皇の時の年号(一二七五―一七八)。文永十二年四月二十五日改元。代始による。出典は文章博士菅原在匡の勘文に「周礼曰、以治建国之学政」とみえる。四年二月二十九日弘安と改元。(『国史大辞典』)
- 18 藤原経朝⇨世尊寺経朝(一二一五―一二七六)。鎌倉時代の公卿、書家。広橋頼資の子。世尊寺行能の養子。左京権大夫。正三位に至る。世尊寺家九代の能書で、和歌は「続後撰和歌集」以下の勅撰集に入っている。著作に「心底抄」。(『日本人名大辞典』)
- 19 天子直筆の額。また、勅賜の額。
- 20 津戸三郎⇨津戸為守(つのとためもり・一六三一―一二四三)鎌倉時代前期の武士、御家人。菅原孝標(たかすえ)の孫、津戸為広の子。長寛元年(一一六三)に生まれる。居所は武蔵国多摩郡谷保で、この地に菅家ゆかりの天神社と別当安楽寺を移し再興したと言われる。治承四年(一一八〇)石橋山の戦以降源頼朝に従い、建久六年(一一九五)東大寺供養のとき供奉して上洛し、法然房源空に帰依した。法名は尊願。源空の根本の弟子と称され、熊谷直実とともに武蔵国での専修念仏弘通に尽力した。仁治三年(一二四二)十一月の如法念仏の結願日に割腹し、翌寛元元年(一二四三)正月十五日に往生したという。(『国史大辞典』)
- 21 東鑑⇨吾妻鏡(あずまかがみ) 鎌倉時代の史書。五二巻のうち、巻四五が欠ける。鎌倉幕府が公的にかかわった編纂物と推定され

る。治承四年（一一八〇）の源頼政の挙兵から、文永三年（一二六六）に惟康（これやす）親王が將軍になるまでの八七年（うち二年分欠）にわたる幕府の歴史を日記体に記述。鎌倉幕府研究の根本史料の一つ。

^{2/2} ①勢いがはげしい。②さかんにする。

^{2/3} 一般の人民。衆民。庶民。あおひとぐさ。

^{2/4} めでたい事の不思議なしるし。瑞相。吉兆。

^{2/5} 神仏の通力に現われる靈妙な験（しるし）。

神仏の不可思議な感応。祈願に対して現われる効験。利益（りやく）。利生（りしょう）。

^{2/6} その時点からある程度年代の隔たった昔。

なかむかし。中世。

^{2/7} 荒れてさびしい有様になる。

^{2/8} 有徳「人」（うとくにん） 富裕者の意。

有徳人とも書き、有徳の人・徳人・得人などともいう。中世から近世まで用いられた語であるが、文献に数多くみえるようになるのは鎌倉時代後期からである。（中略）有徳人とはかく貪慾冷酷とみられたために、現世利益または滅罪・懺悔の意味でかえって宗教的な意識をもったり、そういう説話が伝えられたりしたのである。有徳人のこのような非領主的、庶民的な致富の側面は、やがて近世の上方町人に引き継がれたから、仮名草子や浮世草子などにも有徳人という語やその話を残す

ことになった。（『国史大辞典』）

^{2/9} 仏語。三施の一つ。金品などの財物を布施すること。

^{3/0} あることが行なわれる助けとなる縁。所縁を明らかにするための助け。寺院堂舎の修造などに際して金銭を寄進することにもいう。助生縁。

^{3/1} （だんおつ） 檀那（だんな） 仏語。僧のために金品などをほどこす信者。

^{3/2} 桜町・桃園両天皇の時の年号（一七四四—一七四八）。寛保四年二月二十一日改元。

^{3/3} 別当「寺」 神社に付属して置かれた寺院。明治元年（一八六八）の神仏分離で廃絶。

^{3/4} 賢者 立者（りっしゃ） 大法会の論議のとき、探題の提出した論題に義を立てて問者の難問に答える僧。

^{3/5} 慈性 慈性入道親王（じしょうにゅうどう） しんのう・一八一三—一八六八）江戸時代後期、有栖川宮韶仁（ありすがわのみやつなひと）親王の第二王子。天台宗。大覚寺に入り、文政五年光格天皇の養子となり、親王宣下のものち出家。東大寺別当、東叡山輪王寺門跡をへて、文久二年（一八六二）天台座主。一品、准三宮にのぼる。幼称は精宮。俗名は明道。法号は大樂王院。（『日本人名大辞典』）

武州多摩郡谷保村天神は、思うに恐れ多い神の御跡が置かれている霊場である。その尊影は、およそ七五・五センチメートルの座像である。つらつら考えてその由来を尋ねる。

第六十代醍醐天皇の延喜年間に、菅原道真が筑紫国の太宰府へ左遷された。四人の息子達もそれぞれ違う国へと左遷された中にも第三の御子の三位中将菅原道武卿は武蔵国谷保村へ配流となってやってきていた。そして、菅原道真が亡くなった後、道武は父の配所を慕って嘆くあまりに、心づくしの筑紫国太宰府からこの谷保の里に移させ、同じ菅相公の尊容を彫刻して、聖廟を立て鎮座させ、本当に父母への奉仕になぞらえ、変わらず朝に夕にかしこまり誠意を尽くした。その天神がこれ（Ⅱ谷保天満宮）である。また、道真の菩提のためとしてそばに寺を建立した。今の梅香山安楽寺がこれにあたる。その後、人皇九十年代後宇多院朝建治元年（一二七五）のことだとか、勅使の正三位藤原経朝卿に仰せ遣して天満宮の勅額を賜った。

道武卿七代目の末裔に津戸三郎為守がおり、十八歳で初めて源頼朝に従って石橋山の合戦に赴き、それから後、至る所で挙げた功名は、その数を知らない云々と『吾妻鏡』にある

その功名はなお先祖「の名」を耀かし、家を継いで此地「Ⅱ谷保村」に住んだ。そもそもこの天満宮は一千余年の昔から天神の徳なお新たに、日に新しく、また月々に盛んである。人民で一度願かけをした者で奇端靈験を得なかった者はいない。しかし、中世の修造以来、長い年月が経過し、社殿は荒れて棟や梁が破れるに至り、住持の某は自分で誌すことができないうために四方の裕福な人々を募って、金銭や品物の多少を問わずに勧進し、他力の資助を乞い願う形となった。ほんの少しの寄進でも縁を結ぶ助けとなり、当社の修造を満足させるだろう。

さては施しをする檀那にはこの神の守護もまたたしかであろうと言う。

延享四年（一七四七）丁卯夏五月二十五日

天神別当

安楽寺 堅者 慈性誌す